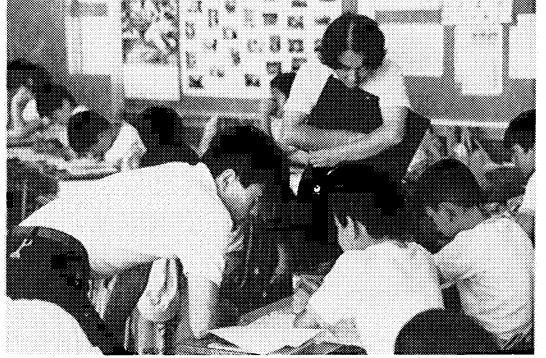
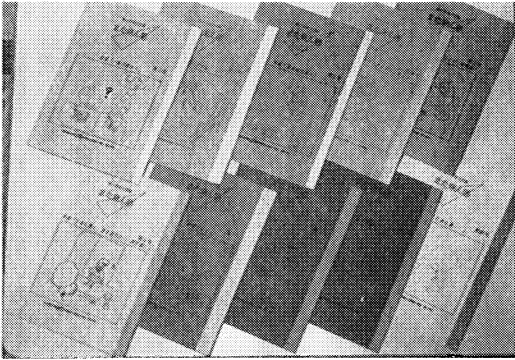


資料5 机間指導の様子



- ている。また、児童発言率は五六・二％から、七〇・二％へと増加している。このことから、児童の話し合い活動が充実してきたことがうかがえる。
- (五) **文芸集作成**
  - 平成二年十月から平成三年三月にかけて文芸集「また来ん春」全二〇冊を作成した。(資料6)
  - 企画を自分たちに任せられたため、非常に意欲的に編集作業に取り組んだ。
  - 体裁が美しいので、「もっと作りたい」等の意見が多く、この面からも書く意欲が支援できた。
  - 作品に朱を入れないことで、純粹に自分の意見を述べるとい

資料6 文芸集「また来ん春」第II期10冊



- とに没頭できた。
- 保護者の投稿もあり、作文に対する意識の高揚がみられた。
- 小説やドラマなど、それぞれの興味の対象に自分なりに解釈し、論評を加えることができるようになった。
- 平成二年度でこの作業を行った結果、平成三年度は、実際に授業で活用できるような、短歌集「緑葉集」や「主題に関する研究集」を作ることができるようになり、書くことに対する抵抗が消去できたばかりか、その意欲を持たせることができた。
- 物語で学習した人物の心の触れ合い方、見つけ方を自分の生活、

(六) **学習発表会**

- 題材を地域に求めた自作脚本、「御神明様異譚」を平成元年度に上演した。その後日談という形で平成三年度に「後日譚 御神明様異聞」を上演し、身に付けた表現力を発表する機会とした。自分たちの発表により、人に感激を与えることを味わわせることができた。

(八) **研究の成果と今後の課題**

(一) **研究の成果**

- 国語科学力検査の推移を検討した結果、平成元年度以降の国語科学力に有意な伸びが認められた。
- 言語事項を中心とした教材研究は、児童の認知面での実態をとらえる基盤となり有効であった。
- 事前・事後テストを自作し、実施した結果、児童や設問そのものの問題点が浮かび上がり、指導の重点が明らかになった。
- テキストプリントは、自分の考えを自由に書き込め、話し合いの際、どこを問題にしているのかが明確になり有効であった。また、机間指導との組み合わせで、低位の児童も話し合いに参加できるようになった。

(二) **今後の課題**

- 話し合いの際に、自分の意見の根拠を明確にした結果、話し合いの中心点がはっきりして、全体での意見の練り上げに有効であった。また、話し合い活動が、自分の意見を変え、友人の意見を変え、さらに全体の意見を高めていくことを実感し、充実感を持たせ、意欲を高めることができた。
- 自分の意見を思いきりぶつけるということを重視して、文芸集作りを行ったため、児童の自己解放を促すことができた。
- その結果、書くことに対しての抵抗がなくなるとともに、もの見方が多角的、かつ深くなり、友人どうし、児童対教師、児童対家族の関係を客観的に見つめていくようになる態度が育った。
- 親子関係をはじめ、国語科の学習を生かして、自分の生活を膨らませていく生き生きとした態度は、何よりも本研究の成果をものがたっているものと言える。
- (二) **今後の課題**
  - 表現領域へも積極的な指導を行い、言語事項を核として、理解領域との相乗効果がねらえるようにしていきたい。
  - 話し合いだけでなく、書くことを通しても思考力が高められるよう工夫していきたい。